

身体操作・感覚変化  
or  
誤認・常識変換の2パターン！

憧れの気高く美しい大佐が  
キモ男の変態肉奴隷に  
変えられてしまいました…





俺の名前は●●●。

ほんの数ヶ月前までは帝国軍の下っ端兵士として  
こき使われる日々を送っていた。

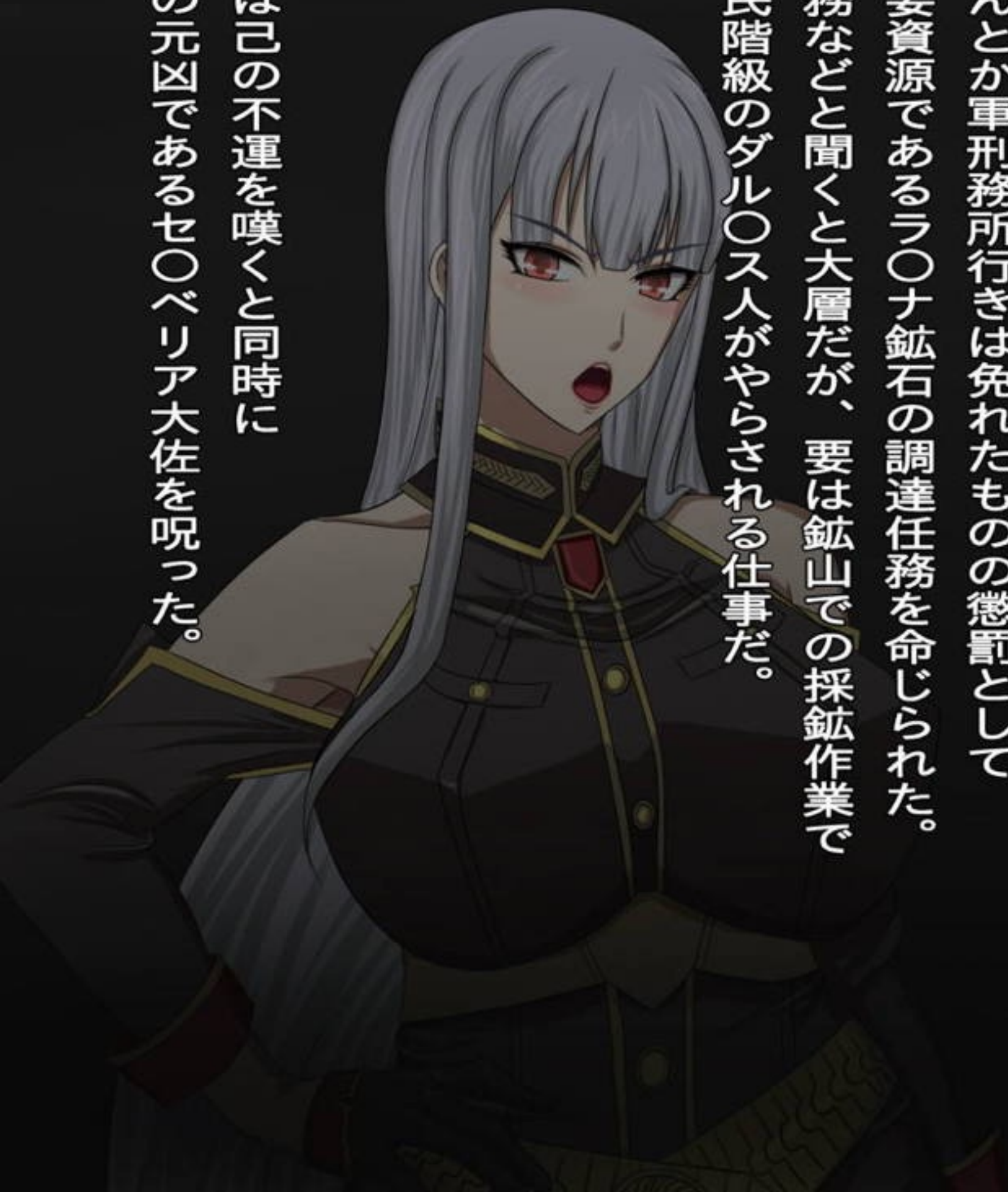
ある日、その鬱憤を発散しようと所属する部隊の指揮官

「セ○ベリア・ブ●ス」大佐の着替えを覗こうとしたのが  
運悪く見つかри、軍法会議にかけられる羽目になった。

なんとか軍刑務所行きは免れたものの懲罰として  
重要資源であるラ○ナ鉱石の調達任務を命じられた。  
任務などと聞くと大層だが、要は鉱山での採鉱作業で  
賤民階級のダル○ス人がやらされる仕事だ。

俺は己の不運を嘆くと同時に

その元凶であるセ○ベリア大佐を呪った。





そうして過酷な労働に従事し、叶うはずもない大佐への復讐を夢想する生活を過ごしていたら転機が訪れた。

鉱山で落盤事故が起きたのだ。

幸い俺は大した怪我も無かったが、一緒に作業をしていたダ○クス人の老人が巻き込まれ重傷を負い、亡くなった。

たまたま近くにいた俺が看取る形になったのだがその際にこの紫色の石を譲り受けた。



虫の息の爺さんが語ったところによると

これはラ○ナ鉱石に特殊な加工を施して作られた

ヒプノ鉱石というもので、持ち主の強い感情に反応し

それを繰り返すことで光を発するようになるらしい。

そしてその光を見た人間は深い催眠状態に陥り、

暗示で持ち主の意のままに操れるようになるという。



爺さんはヒプノ鉱石の力を説明をし終わると、

「どうか自分の代わりにこの石を完成しダ○クス人の独立を——」  
そう言いかけて息を引き取った。

しかしその時は老人の戯言と思い、全く信じなかった。

その日の夜、いつものようにセ○ベリア大佐を裸にひん剥いて辱める妄想にふけっていると、石が突然光り出した。

爺さんの言っていたことは本当だったのか、強い感情とは欲望でもいいのか、などと驚き、それでもまだ半信半疑だったが試しに鉱山の監督官に光を見せて、俺を自由にするよう命じそれが果たされたことでようやく本物だと確信した。

そして今。石の力で新しい名前を手に入れ別人になり、セ○ベリア大佐の副官として部隊に戻ってきた。

妄想を現実にして復讐するために……





一目目・大佐の執務室

●●●視点





「……より配属されました○○○中尉です。  
武勇で名高いセ○ベリア大佐のもとで働けて光栄です！  
よろしくお願いします」

「ああ、話は聞いている。  
中央の特命とはいえ、急な配属ご苦労だったな」





(どうやら俺の顔を覚えていないようだ。少し癪だが好都合ではある)

「早速ですが本題に入りましょう。」

「こちらを大佐にお見せするよう言われています」

「それは……ラグナ鉱石か？  
色が変わっているが……」

「ええ、特別な力のあるもので……」



「」



「ほら、じつすると光るんですけどよ」

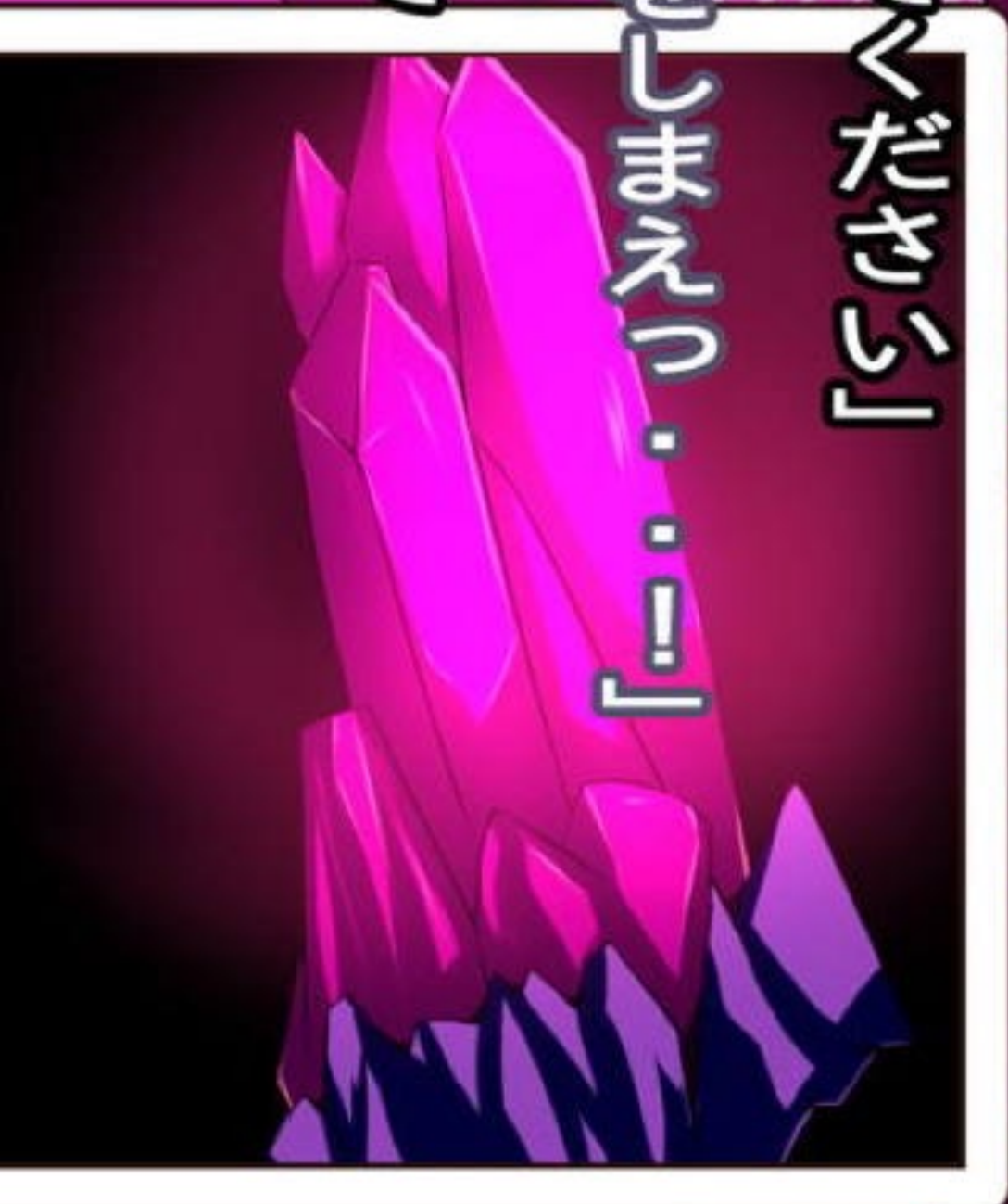
「くっ…な、なんだこれは…？ 頭が…」

思考が、うまく…その光のせいか…」

「ひひっ、そっぴよ。もっどよく見てくださる」

「ぐうっ…貴様あ…！ 今すぐ、それをしまえっ…！」

「ダメダメ、頭の中が真っ白になるまで  
しっかり見ましようねえ」





「……………」

「ははは！ やった！ やったぞ！  
もつと手ごずるんじゃないかと思っただが  
案外あっけないもんだったなあ……………」



（いつもすまし顔だった大佐の  
こんなよだれ垂らした間抜け面がおがめるなんて、  
まったくあの爺さんには感謝してもし切れないな）



（おっと、感動してる場合じゃなかった。  
お楽しみはこれからだからかな）

「…いいですか、『これから私が言うことには  
疑問を持たず、全て素直に従ってください』」

（何人が試してわかったことだが、最初は丁寧に  
語りかけないと暗示だと認識されないらしい。  
面倒だが、回数をこなす内に相手が命令に  
慣れてくるから、それまではしょうがない）

「はい……」

「…従います……」

「よう、ごじゃあま、服を脱ぎまらへん」



「はっ…脱ぎます…」

（おおおっ！ わかってはいたけど脱いだら  
さらにデカイな！ 想像以上のサイズだ…）





(夢にまで見た大佐の爆乳……！  
ずっしりと重みがあつて  
片手じゃとても掴みきれない……！)

(揉み心地も最高だ……！  
指がたっぷり沈むほど柔らかいのに  
中心に確かな張りがある！)





「はあっ……♡」

「ん？ ひひっ、胸を揉まれて  
気持ちよくなっ たんですか？」

「……はい……気持ちいいです……」

「ハハハっ！ 感度がいいんですね。  
じゃあ次はどれぐらい感じてるのか  
見せてもらいましょうか」





「机に乗ってマ○コが奥まで

よく見えるように広げて見せてください。  
それと部下に対するように喋っていいですよ」

（素直なのはいいが、これだと大佐を辱める  
実感が薄れるからな）

「…わかった…これで見えるか？」

「ええ、バッチリですよ。

もうすっかり出来上がってますねえ。

…ん？ ひひっ、これは驚いたなあ。

大佐はまだ処女だったんですね。てっぎり

例の皇子様とやりまくってると思ってたよ





「…殿下への想いは敬愛で…  
そういつた類のものでは…ない」

「へえ、じゃあまさか恋人いた事ないんですか?」

「その…カ●ル少尉と…」

「…ご、交際している…」

(カ●ル少尉…どこかで聞いた名前だな…)

そうだ、確か俺の前の副官だ。

ふん、うまいことやったもんだ)

もしい

「なるほど。彼とはどれぐらい進んでるんです?  
その大きな胸は揉ませてあげたんですか?」

「そっ、そんな破廉恥な真似はっ…!」

「…まだ、キスしただけだ…」

(ひひっ、エロい身体の割に純情で結構だが  
マ○コ広げて言う台詞じゃないな)



「初々しいですねえ。でもそれだと身体を持って余したりしませんか？」

「そうだ…だから…その…時々、自分で…シている…」

「ハハハっ、なかなか衝撃的な告白ですね。じゃあどんな感じでやるのか実演付きで説明してください」

「わ…わかった…」

まず、左手でこうやって…入り口を擦りながら…右手で胸を揉んだりして…ふう…んっ♡

もももも

くっくっ♡



「んっ！ んんっ…」

♡ ふうっ…♡

「意外と大胆な指使いだなあ。  
いつもこんな激しいんですか？」

「いや…んう…でも、いつもより  
気持ちいいから、ゆびっ♡がぁ、あんっ♡」

♡

（ふむ、催眠で従順になってはいても

羞恥心はそのままだから、

見られながらのオナニーで興奮したのか？

ひひっ、お堅いようでエロい身体に似て

根は相当なスケベかもしれないな）



「はい、オナったままでいいんで  
またこれ見てくださいなね〜」

「ん……」





「いいですか、【副官が着任したら親睦を深めるためにセックスをするのが規則】です。その際は【お互いより快感が得られるよう最大限協力し合うのが望ましい】んですよ。」

「親睦のため……セックスする……」

「そうです。部下との信頼関係を築くのは大切なことですからねえ、ひひっ」

「じゃあ意識がハッキリしてきたら、上官から提案してくださいね」





「ん……よ……よし、○○○中尉……」

その…規則だ。せ、セックスをするぞ」

「はっ、大佐のような美しく

エロい身体した女とヤレるなんて

光栄であります！ ふひひっ」

「そっ、そんな下卑た言い方をするな！

これはあくまで軍務だぞっ」

「ですが、快感を得るため協力し合おうよう

規則で定められていますからね。

私は下品なビッチが好みなので

セ○ベリア様も出来るだけチ○ポ好き

尻痴女のように振る舞って

「協力してください」





「あ……ああ、わかった。努力しよう……」

「ありがとうございます。じやあ早速ですがチ○ポねだりの口上やってももらえますか？」

『セ○ベリアの処女マ○コにチ○ポぶちこんでガバガバのビッチマ○コにしてください』『って。さっき言ったことを踏まえて笑顔でね』

「っ……せ、セ○ベリアの処女マ○コにチ○ポぶちこんで、ガバガバのビッチマ○コにしてくださいっ……」





「まだちよっと硬いけど、まあらららっしょん。  
それじゃ始めましようか」

「あ、ああ……」





「蒼き魔女と恐れられる大佐でも

チ○ポ入れられるとなると、緊張するんですねえ」

「っ…緊張などしていいない。無駄回を叩かず

さっさとその汚いチ○ポを

私のマ○コに挿して済ませる……」

「ひひっ、了解しました。

セ○ベリア様も規則を忘れならでよ

ほら、今どんな感じが言ってくださるよ」





「うう…あ、熱いチ○ポが  
入ってきくて……  
く…うっつ!!」

「お、開通おめでと〜いからます。  
すいませんね、彼氏でもならぬので  
処女もらっっちゃって」





「痛みが快感に変換されます」。  
これでセ○ベリア様の初体験は  
素晴らしいものになりますよ、  
「んん」

「それと「快楽を与えられる度  
与えてくれた人物に感謝して下さい」。  
「その快感の度合いに応じて  
相手への感謝の念も強くなります」





「んっ♡!?

なっ…♡

んう♡」

「いやあ、初物だけあって  
キツキツで気持ちいいなあ。

セ○ベリア様の方も慣れてきたら  
気持ちよくなってきたんじゃないですか?」





「そんなことっ  
ないっっ♡ ひゃあっ♡」

「本当ですか？  
恥ずかしがらなくていいから  
正直に言っ下せら。  
規則を守るために、ねえ」







「ひっ…♡ そっ♡ そうだっ♡  
キモチイイっ♡!  
マ○コ♡おくまでつかれてっ♡

「あはあ ああ あゝっ♡♡



「それはよかった。」

「こちらにもセ○ベリア様のマ○『の  
名器っぷりに、つい中で出しちゃいましたけど  
まあ中出しの方が気持ちいいですからね。」

規則に従った結果だし、しょうがないですよね?」

「ああ……♡

親睦を……深めるためだからな……♡」

「ですよねえ。素晴らしい歓迎を  
ありがとうございました、ひひっ」

「む、うちらも……」

「……くっ、くっ、や、や、何でもない……♡」

おちち





翠日





(昨日は胸がすつとしたが、思っていたよりも  
乱れなかったな。さすがはセ○ベリア大佐、  
精神力も並じやない。)

まあどのみち変態暗示を刷りこんでけば、いずれは……)

「……どうした、何をぼーっとしている。  
早く仕事にとりかかれ」





「はいはい、仰せの通り  
仕事にとりかかりましょう」

「……」





「……………」

「よし、しっかり効いてるな。」

「今日の任務は特殊な仕事。どんな内容でも疑問を持たず  
専門家の私の指示に従って遂行してください。」  
「わかりましたか？」

「……特殊な……任務……」

お前に……従う……」

「ええ、そうです。それではま……」





「股はもっとな開いて……結構です。これで準備完了ですよ」

「よし……それでは〔マ○コカウンセリング〕を開始する。  
●●●中尉、私のおマ○コの状況確認にとりかかれ」

「はっ、了解しました！」

（くく、あの太佐が真面目な顔でこんなバカげたことを！  
笑いをこらえるのが大変だ）





「昨日処女喪失したとはいえ、まだまだ綺麗なマ○コですねえ。  
どれぐらい感じやすいマ○コなのか確認するので  
そのまま手でマ○コ開らして……」

あ、ついでにどう自分でオナる時のように  
乳首でも弄っててください」

「わかった、ごうか」





「……」

「どうしました？ 仕事ですから恥ずかしがらねえ  
【思ったことは何でも正直に話してくださいね】

じゅわん  
おちゅん  
♡♡









「はあっ♡んんう♡

そこっ…♡気持ちいいぞっ♡

自分でも指でよく擦るところだっ♡」

「ははは、んんうおな。か。あ……」

じゅわん♡  
おろろ♡









「はあ…♡ はあ〜…♡」

「これでセ○ベリア様のおマ○コ○の弱いところ  
わかりましたね。かなり有益な情報じゃないでし  
ょうか?」

「う、うむ、そうだな。有効に活用しろ…♡」

(ひひ、今に自分からねだるようだしでやるぞ)





「じゃあ次は大佐に私の  
「チ○ポカウンセリング」を  
やって頂きたいのですが、よろしいですか?」

「む、無論だ。  
「部下のチ○ポのデータを  
把握しておくのは上官の務め」だからな」





「…チ○ポとはここまで膨張するものなのか。  
う…脈打っていて、熱い…  
それにしても臭うな…酷い臭いだ」

「ひひ、すみません。

あまり洗う習慣が無いもので。

こすったらもっと大きくなりますよ」



「ごうすればいいのか？  
む……大ききだけでなく  
硬度が増して、臭いもさらにひどく……  
せ、整備が足りてないのではないか？」

「そうですねえ。ですが恐れながら  
【部下の身だしなみの乱れは上官のせら】  
ではありませんか？」





「……確かにお前の言う通りだな、すまない。  
私が責任を持って綺麗するべきなんだが……」

「ふひひ、安心して下さい。」

いくらセ○ベリア様でもチ○ポ掃除は  
不慣れでしょうからやり方を教えて差し上げます。

【頭を空っぽにして集中して聞き  
しっかりと覚えてください】ね



「そうやって舌を使って  
亀頭の汚れをしっかりとそげ取って、  
そう、手でしごくのも忘れずに」

ええ、

ええ、

「れるっ♥  
れりゆりゆっ♥  
れるお…♥」





「上手ですよ。  
ほら、だいぶ綺麗になりました。  
【部下の子〇ポを清潔に出来ると  
達成感がある】でしょう？」

ええ、

ええ、

しゃん

「じゅぽん……」

ああ……子〇ポきれいでできるよ、  
すっきりする……  
れろっ……



「それはよかった。  
じやあ最後の仕上げするんで  
ちよつと離れてくださいな」

「わかった……」





「うっ…」

「ぶっ、すっきりした。セ〇ベリア様の美貌に  
ぶっかけは映えますねえ」

「……垂れてる分も掃除した方が  
いいんじゃないか？」

「ん？ ひひ、そっつですわね、お願いしますわよ」



「そうそう、  
「顔についた精液はザーメンパックで  
チ○ポカウンセリングが成功した証。  
誇らしい勲章のようなもの」ですから、  
今日一日そのままで大丈夫ですよ」  
気にせず

「…ザーメンパックは……勲章……」





「さすがセ○ベリア大佐、チ○ポカウンセリングも初めてとは思えない手際でザーメン絞り出ししてお見事でした」

「お前もマ○コカウンセリングご苦労だった。ザーメンパックは有難く受け取っておこう」

（ははは！ ぜひその勲章を基地中に見せびらかして回って欲しいもんだ）





# その夜





「……こんな時間に寝室に押しかけて何の用だ？」

「いやあ、大した用ではないんですが……」

「急を要する事でないなら、明日にしろ」

（チ○ポカウンセリングで少しは慣れた気がしたが  
やはりこの男のことはどうも好きになれない。  
何かが引っかかる……）





「まあそう言わずに、ほらこれ見て  
【落ち着いて何も考えないで下せろ】」

「っ!?! それは……!」

(そうだ! 前にもこの光を浴びて……くっ……  
あたま……なに……も……)






「……………」

「ひひ、昨日より暗示状態に落ちるのが早くなりましたね。  
慣れてきたら自然と命令を受け入れたくて  
媚びるようになれますよ」





A character with large breasts and a yellow and white striped outfit. The character has long, light blue hair and is wearing a yellow and white striped hat. She is looking directly at the viewer with a surprised expression. Her outfit consists of a yellow and white striped top and a yellow and white striped skirt. Her breasts are large and are the central focus of the image. The background is a simple, light blue and white pattern.

「セ○ベリア様のような大人の女性が  
そういう赤ちゃんのような服を着ると  
成就した身体とアンバランスさがいいですねえ。  
さて、まず「今している体勢や格好は  
何もおかしくくない、普通の状態」ですよ」

「……んじゅん……おかしくないら……」



「そうです。【セ○スリリア様は今から四歳の頃の  
自分に戻ります】」



「【そして目の前にいる男の人が  
セ○ベリア様の大好きなパパです】。  
いいですね？ これからだんだん  
意識がはつきりしてきますよ」



「んっ……」

「おちおちん、ヤ○ク○シ○」

（あれ？ えっぞ M○E○R○U……）

「……ペーパー」

（そうだ、わたしのパパだ。

だいすきなパパなのに

どうしてわかんなかったのかなあ）





「今からおねしよせずにねんね出来てたか  
パパが見てあげるから」

おマ○「くぱくぱしましよっね〜」

「お、おねしよなんてしないよっっ  
そんなごみぢやらあ……」





「うーん、お母さん、何かいちばんおもしろいよ」



「え、あ…あれ？どうしてさ？」

「パパにみられてるよ、おまたがなんか」

「へんなかんじだねって…おしるがどまらないの…」







「よかったあ……じゃあわたしももっとエッチになって  
いっばいまんじろもらすねっ♡」

「はは、そうか、偉いなあ。」

セ○ベリアは本当に頑張りやさんだね」

「えへへ……」  
（パパに褒められた！）

「じゃあそんな頑張り屋さん  
のセ○ベリアも  
もっとエッチになれるご褒美をあげるよ」



「ほら、寝美のオチのポ注射だよ」

「んっ、おちゆうしゃいたいからいやあ……」

「この注射は全然痛くないから大丈夫だよ。」

「ほら、おマ○コに入っても痛くないだろっ?」





「奥まで全部入ったけど、痛くなかったらどう？」

「ほんとだあ、おちんちんささってるのよ  
ぜんぜんいたくない。へんなのよ。  
これでえっちになれるの？」

「どうだよ、これからオチのポ動かして  
ぶんぶんHしちゃってあげるからね」

す  
ち  
ゅ  
っ  
♡











「うんっ、わかったっ♡  
エッチなわたしのおマ○コに  
パパのオチ○ポちゅうしゃいしぽろっ♡」

「うんっ、それっー」

「ひっ♡んふっ♡  
あひっ♡  
パパもわたしのことっ♡  
いっばいすぎになっつてええっ♡」









「今セのベリアのおマのココに一杯入った汁の名前は  
ザーメン、これがお腹の中にかけられて  
すごく気持ちよかっただろっ？  
その気持ち良いのをアクメって言うんだよ」

「あくめ……..  
わたひ……あくめ、だいしゅびら……..  
」





「そう、セ○ベリアはアクメもザーメンもオチ○ポもみ〜んな大好きなエッチな女の子になるんだよ」

「うん、わかったあ……」

でも、ぱぱのことがいちばんだいじゆきら……」  
♡

「それは嬉しいなあ。でも今は『暗示状態に戻って  
パパの顔を忘れてください』」

代わりに「子供の頃から毎晩、パパに  
言われたようなエッチな子になるうと欠かさず  
オナってたのはよく憶えています。」  
これはセ○ベリア様の秘密の習慣です」。

ひひ、この記憶で立派な変態ビッチになれるよ、セ○ベリアちゃん」



数日後





「おはようございます、セ〇ベリア大佐」

「ああ、〇〇〇中尉か。おはよう」

(何故だろう、以前ほどこの男に不快感を覚えない。  
いや…それどころか好ましくすら思えてくる)





「じゃ今日もチのポカウンセリングしてもらえますか？  
毎日抜いて貰ってるので、すぐ溜まっちゃって」

「そ、そうか……まったく、仕方のない奴め。  
だが【副官のチのポカ管理は上官の務め】だからな♡」





「またこんなにチンカスを……  
昨日ロマ○コで掃除したばかりなのに、  
たるんでいる証拠だぞ」





「ちゅばっ♥ぢゆるるっ♥れるっ…  
相変わらず汚いチ○ポだ。  
味も臭いも酷いものだぞ」

えろ、♥

えろま、♥

「ひひ、毎度すみません。

ですが汚いチ○ポの方がお好みなのでは？

今もそんな美味しそうに

舐めてくださってるじゃないですか」



「ちゅぷぷっ  
れりゅっ  
れるお……  
勘違いするな、お前のチンカス処理は  
あくまで職務でやっているにすぎない」

（そう、私はチ○ポが好きただけだ  
ただ好物のチ○ポを綺麗にできることは  
嬉しいし、おマ○コに入れてもらうためには……）

えろっ♡

えろっ♡

♡





(……何だ？ 何かがおかしい気がする。  
何か大切なものを失っているような……)

「やあ綺麗になりましたね。

とりあえず掃除はそれぐらいでいいですよ。

今日は顔じゃなくて、マ○コの中に  
ザーメンかけさせてください」

「む……そうか」

(残念だ、ザーメンパックされたかったのだが……  
だがおマ○コにチ○ポを入れられる喜びには  
代えられない。「私は子供の頃から  
これが大好き」だったのだから♥

……？ さっき何か考えていたはずだが……  
まあいい。今は職務に集中しなければ)



「ムチムチしていいお尻ですよ。セ○ベリア様は本当にエッチな身体をお持ちだ」

「ふ、ふざけた口をきくなっ」

（ああ…❤️ パパに似た雰田気を持つこの男に褒められると、つい顔がほころんでしまう❤�）





「ひひ、これだけエロい身体なら  
恋人のカ●ルくんとはさぞかし  
やりまくってるんでしょうねえ」

「見くびるな！


私は女である前に軍人だ。

「女性将校は副官以外と性的な行為を  
行ってはならない」という軍規を破りはしないっ！

いかにマ○コが疼きチ○ポでハメて欲しくなるうと  
カ●ルには指一本触れさせるつもりはないぞ！」







「ふひひっ…失礼しました。。  
ではセ○ベリア様のご覚悟に敬意を表して  
私も大佐を孕ませるぐらいの気合を込めて  
チ○ポ突っ込ませて頂きましょうー！」

「う、うむ…その意気だ。

私のエロマ○コを

お前の臭いザーメンで満たしてくれっ♡」



「んっ♡ふっ♡はあっ♡はー♡  
いっいきなり激しく動かし過ぎだっ♡」

「そうですか？  
しっかり濡れてたから  
飛ばしていいかと思ったんですが……  
じゃあペース落としましょうか？」





「当然…だっ  
「いついかなる時もチ○ポを  
受け入れられるようすぐ発情出来る  
マ○コ」であるよう訓練しているのだからなっ  
女性将校の基礎中の基礎ひやっ」





「そんな決まりがあるとは  
知りませんでしたねえ、ひび。  
お……そるそる、射精しますよー」

「あひひゅうううう」





「ぶっ、すっきりした。」

「今日も具合のいいマ○「ド」だよ」

「はあ… はあ…」

「お前のチ○ポも素晴らしかったぞ」

「こんな濃厚なザーメンをありがとう」

「これだけ沢山だと、あとで「避妊のために」

「マ○コザー汁を飲み干す」のも苦労しそうだ…」





キョウらに数日後





「ああ、○○○中尉か。どうかしたのか？  
チ○ポ処理ならマ○コ○の用意をするが……」

（ひひ、赤ちゃん用の胸も股間も全部丸出しの服なのに  
本人は当たり前前の格好と思って対応してくるから笑える。

しかし色々暗示かけて遊んだおかげで  
最初よりだいぶ当たりが柔らかくなっ  
て変態行為も  
下品な言葉遣いにも馴染んできたな）





「いえ、別件ですが……大佐にしては  
ずいぶん可愛らしい寝間着ですねえ」

「う…似合わないのはわかっているが、子供の頃からの習慣で……  
わ、私の服の事はいい。それより用件は何だ？」

（くく、似合う似合わないの問題じゃないだろうと）





「今後の『排泄行為の仕方』を教えて差し上げようと思って」「はいせ…どういうことだ?」

「大佐は『トイレの使い方を知らない』んですよ。」「習った覚えがない」でしょう?」

「……ああ、そうだ…そうだった…わからない……」

(言葉のトーンだけで指示が出せるようになったし  
すっかり暗示を受け入れてしまふ身体になっちやってまあ)





「そっうだ……トイレの使い方もわからぬい……  
ううう……どっつすればいいんだ……」

（ははは！ あの太佐がこゝまで  
間抜けになるんだからたまらぬいな！）





「それをお教えするため  
来たのですから、ご安心ください」

「そ…そうか、助かった……ありがとう。  
副官とはいえ、こんなことまですまないな……」

うう……何故私は…自分が情けない……」







「まずはおむつで排泄を出来るだけ我慢する  
ことを身体で覚えましょう。  
いきなりトイレを使うのは難しいでしょうからね。  
普通の大人なら当たり前前にできる事ですけど」

「くっ……わ……わかった」

「どうしても我慢できなくなって出したくなった時は  
私に許可とってくださいな、ひひっ」



「……お、おしっこだ」  
●●●中尉。その……吐してもいいだろうか？」

「おしっこですか？ うんこですか？」

申請は形式に則ってハッキリお願いします」

「……お、おしっこだ」

「おむつの中に、おしっこを漏らしたいんですね？」

恥ずかしくてもちやんと口に吐してもらわないと」

「そうだっ！ おむつにおしっこ漏らさせてくれ！

頼むう……もう、限界なんだ……！」





「仕方がないですねえ……  
いいですよ漏らして」

「ああっ！ ありがとうー！  
んっ……♡ はあああ……♡ やっ  
と出せたあ……♡」

「ひひ、  
だいぶ溜まってたみたいですね」





「ふーん、やっぱりおむつだと垂れてこないんですねえ。  
でもさすがに小便臭いなあ……」

「す、すまない……」

「まあしょうがないんですけどね。  
だけど、いい年してまだおむつに頼ってるなんて  
恥ずかしいことだってちゃんと自覚して下さるよ」

「うう……わかってる。

お前の手を患わせないよう、  
善処する……」





「ふう……結局今日だけで3回も漏らすなんて信じられませんよ。こんな赤ちゃんみたいなの大佐がいるなんて我が軍の恥ですねえ」

「……………」





「うう……返す言葉がない。本当にすまない……」

「謝られてもねえ……  
で、この汚いおむつを取って欲しいんですけどよおね？  
でしたら、それなりの頼み方がありますよおね？  
ちやんとご自分の恥ずかしさを自覚してると  
私にわかるように仰って下さい」

「お……お漏らしするような、みっともない大佐で  
ごめんなさい……  
おしっこまみれの……臭くて、汚いおむつを  
どうか外して下さい……」  
♥

（ひひ、くりくだるの抵抗しなくなってきたなあ）



「おかりました、外す最中に漏らさなうで  
下さうよ？ ひひ……」

「おや、どうも小便以外にも漏らしている  
みたいですねえ」

「ハ、ハハハ……」





「まさかおむつ代えてもらって興奮したんですか？」

驚いたなあ…セ○ベリア大佐が恥ずかしい姿見せて興奮する露出狂のマゾだったなんて……」

「うああ…言わないでくれえ…♡」

（ひひ、言葉で辱められて更に感じてやがる。暗示の効果もあるとはいえ、変態快楽に馴染んできたなあ）





「さすががセ○ベリア様ですね！」

女性将校の任務をこなすために生まれたような  
売春婦以下の変態女じゃないですか！

尿道の締りの悪いお漏らし女だと  
思っていたので見直しましたよ」

「そ、そうか？  
ふふ お前に受け入れられてよかった  
そう…幼いころ父にもエッチな変態女になれと  
言われ、それを目指して訓練に励んだものだ♡」

（っ）  
どうなってるんだかな！  
この馬鹿女の中で「体記憶は





「じゃあお父様も娘が立派な変態になって  
さぞお喜びでしょうね、ひひっ……」

そうだ、変態になりたいのでしたら  
このおしゃぶりを使うとらいですよ。

「これはしゃぶっていると私のザーメンや  
チンカスの味がしてきて、しゃぶれば  
しゃぶるほど美味しく感じるようになるよ。ど  
マ○コを舐められてる感覚がする」んです。

「今よりもっとチ○ポ好きな変態になれますよ」

「変態に……♡」



「んぎゅっ ありがとうっ♡ ひゃっひょん♡  
ひゅかわひえとせつらっひょん♡ ちゅっ♡」

「お、大事に使ってね」





「おむつを外す許可をくれたのは嬉しいのだが……その……  
これでは何かの拍子にめくれたら、全<sup>て</sup>見えてしまう……」

「そうはいってもまだ漏らす危険はありますし、  
パンツを濡らしたら大変でしょう？  
それともおむつに戻ります？」



「い、いや！ これでもいい！」

「それで今日からはどうやって用を足せばいいのだ？」

「そうですね、まず服を全部脱いでくださいわら」



一週間後





「……ほ、本当にこれにしないと駄目なのか？」

(おむつよりはマシだが、こんな子どももの使うおまるで……)

「そうです、段階を踏んでいかなないとね。  
なにせ赤ん坊同然のおむつから始めたんですから。  
次はおまるという訳です。さあ、始めて下さら」





「……セ○ベリア・ブレス大佐……  
臭い……う……ウ○コをケツ穴からひり出す許可を願う……」

（ああ…部下に排泄行為を管理されないとまともな  
生活できないとは、なんて惨めで情けないんだ……）

「ぶっぶっ、好きなだけ出してすっぴんお尻お尻」





「んんっ… ふんっ〜！  
ふんうっ〜！」

はあ…はあ…

「結構詰まってる感じですねえ。  
まあかれこれ…何日してないんでしたっけ？」

「ぶぐうっ…はあ…よ…4日だ…」





「そうそう、おむつにも結局一回しませんでしたね。  
あれってやっぱり我慢してたんですか?」

「……元々っ……便秘気味で、んぐっ……困ってる……んんっ……」

（何故こんな無礼な質問にも律儀に答えてしまうのか  
自分でもわからない……そもそも何故私はこんなことを……）

「お、頭出てきましたよ、ほらもっどらきみでー」





「ふんっ〜！ ぐうっ〜〜〜！」

（もちろん「トイレの使い方も知らない」私に教えるためにやってくれているのはわかっている。だが何故こんな変態じみたやり方で……くっ……確か前にも同じことを考えて……）

「いやあ、セ○ベリア様みたいなお美しい女性でもこんな臭いのをいっぱい溜め込んでるんですよねえ。

しかしまあ、私ならおまるでクソしていると「なんて見られたら死にたくなりますけど、恥ずかしくもないんですか？」





「んん〜っ！ はあく〜…… はあく……  
は、恥ずかしいに決まってるだろう  
だが……」

（ああ、そうだった。何も不思議じゃない。だって私は……）

「視姦られて、蔑まれて悦んでしまう  
マゾの変態女なのだから、むしろ本望だ」

（パパに愛されるような変態女になるためにも、当然のことだ）





「ひひ、そうですね。」

しかし、これでおまるの扱いはバツチリですね。  
人並みにトイレ出来るようになるまであと一歩ですよ。  
さすがセ○ベリア様は覚えが早いですね」

「あ、ああ。お前のおかげだ、ありがとう♡」

（やはり○○○はパパに似ている……  
この男に褒められると嬉しくてたまらない♡）





数日後





「大佐はムチムチのデカ尻も魅力的ですが、やはりこの爆乳が最高にエロいですねえ。」

「一般兵の間でも「一度でいいから揉んでみたい」って大人気なのご存知でしたか？」

「い、いや、そうなのか……」

自分では大きすぎて恥ずかしく思っていたのだが

「性欲の対象にされているのなら**光栄**に思う♥」



「そう、誇っていいんですよ。ひひ。  
さあ今日はこのご立派な胸を使って  
パイズリをやって頂きましょうか。」

「……と言っても最初は力加減も  
わからないでしょうから、このデカパイで  
好きにオナらせてもらいますね」





「しかしホントはしたくない爆乳ですね。  
こんなの揺らして歩かれちゃ堪りませんよ。」

最大に勃起してやっとなのポが顔を出す……  
おや、舐めてくれるんですか？」

「れるっ♥れるるっ♥ぢゅぱあ♥  
う、うむ。ザーメンをしっかり射精せるよう  
協力するのも上官の務めだからな！  
じゅぷぷっ♥」





「はは、助かります。これはたっぷりザーメンを  
ご馳走しないといけませんねえ」

「ぢゅぢゅっ  
ぢゅぽあ  
れりゆりゆりゅっ  
ふようつひやっ  
ふあくひやんひやふんひやほっ」





「ひひ、チ○ポ舐めながら言われても  
なんて仰ってるのかわかりませんよ」

「ぢゅぽぶあっ…  
まったく…黙ってチ○ポに集中させろっ  
さ、さっさと射精せと言ったんだ！  
ぢゅぽぽっ」





「チ○ポ舐めの邪魔して失礼しました、ひひっ」

「くく、すっかりチ○ポに夢中だな。」

「こんなひよつとこ顔で吸い付く浅ましい姿を  
恋人に見せてやりたいよ」









「へえ、勲章のザーメンパツクより飲みたいたいなんて  
すっかりザーメンジャンキーですねえ。  
いらですすよ、ほらー！ たっぷり飲めっ！！」

「とびつぱんっ♡♡」





「ふむ、チ○ポは美味ー♡♡だわな〜」

「ぶぽっ♡♡ぢゅぶぶっ♡♡ぢゅるるるるっ♡♡ぢゅぶぶっ♡♡ぢゅるるるるっ♡♡」





「鼻ならして返事って、まるで豚みたいですわねえ。それにしても毎晩おしやぶりで練習したただけあってチ○ポしやぶりがだいぶ上手くなりましたたねえ。」

そろそろ射精そうなんですわ、このまま射精すのど顔にザーメンパツク、どちらがいらいですか?」「

「ほのふあふあっ♡ふおむっ♡  
ひゃーめんふおみふあいつ♡」



「ふう、出した、出した。」

大佐、ザーメンのお味はいかがですか？」

「いがかくひやくて、ぷりぷりのじひゃねが  
くちをおかひて……♡ ひゃららひゃら♡」

「うわ、まだ口の中ザーメンで  
いっぱいじゃないですか。」

汚いなあ……

食べ終わってから喋ってくださいよ、ひひひ」



「はは！ あんまりパイズリフェラが気持ち良いんで  
いつもより沢山射精てますね！  
せっかく出したんだから全部飲んでくださーいよー！」

「んぞむゆっ♡ わかつひやつひえぶゆ…♡」





「げぷっ……すまない。美味しさに感動するあまり、つい……  
ふふっ、○○中尉、素晴らしいザーメンをありがとう」  
「大佐のデカパイや口がいやらしかったおかげですよ。  
もうチ○ポのためにある性器、乳マ○コとロマ○コと  
呼んでもいいぐらうです」

「乳マ○コにロマ○コか……  
いい名称だ、光栄に思うぞ。ありがとう  
これからもその名に恥じぬようマ○コ  
乳マ○コ、ロマ○コを駆使してチ○ポに尽くそう」



「うう…落ち着かない……  
ほ、ホントにこれを着けて  
過ぎさないといけないのか？」

「そうです、ケツ穴もマ○コに  
するために欠かせない訓練ですよ」





「そうか、**【訓練】**なら仕方ないな。  
しかし……尻穴まで**マ○コ**に  
なってしまうのか……」  
♥

「ひひ、嬉しうらやうか？」

「じゃあ早速やってみましようか。」

無理はしなくていいので

手で引き抜けるように**マ○コ**まで**マ○コ**に挿入してやる」





「はあ…はあ……ぐうっ！  
んふう……は……」

「はは、無理しなくていいんです。今がそこが限界みたいですね。とりあえず戻して下さらよ」





「んんっ♡ はあ……♡  
はあ……妙な感覚だ♡」

「ひひ、どうもセ○ベリア様は  
出すより入れる時の方が  
好きのようですねえ」







「うむ…♥ 特にめくれたケツ穴が  
戻っていく時の刺激が……♥」

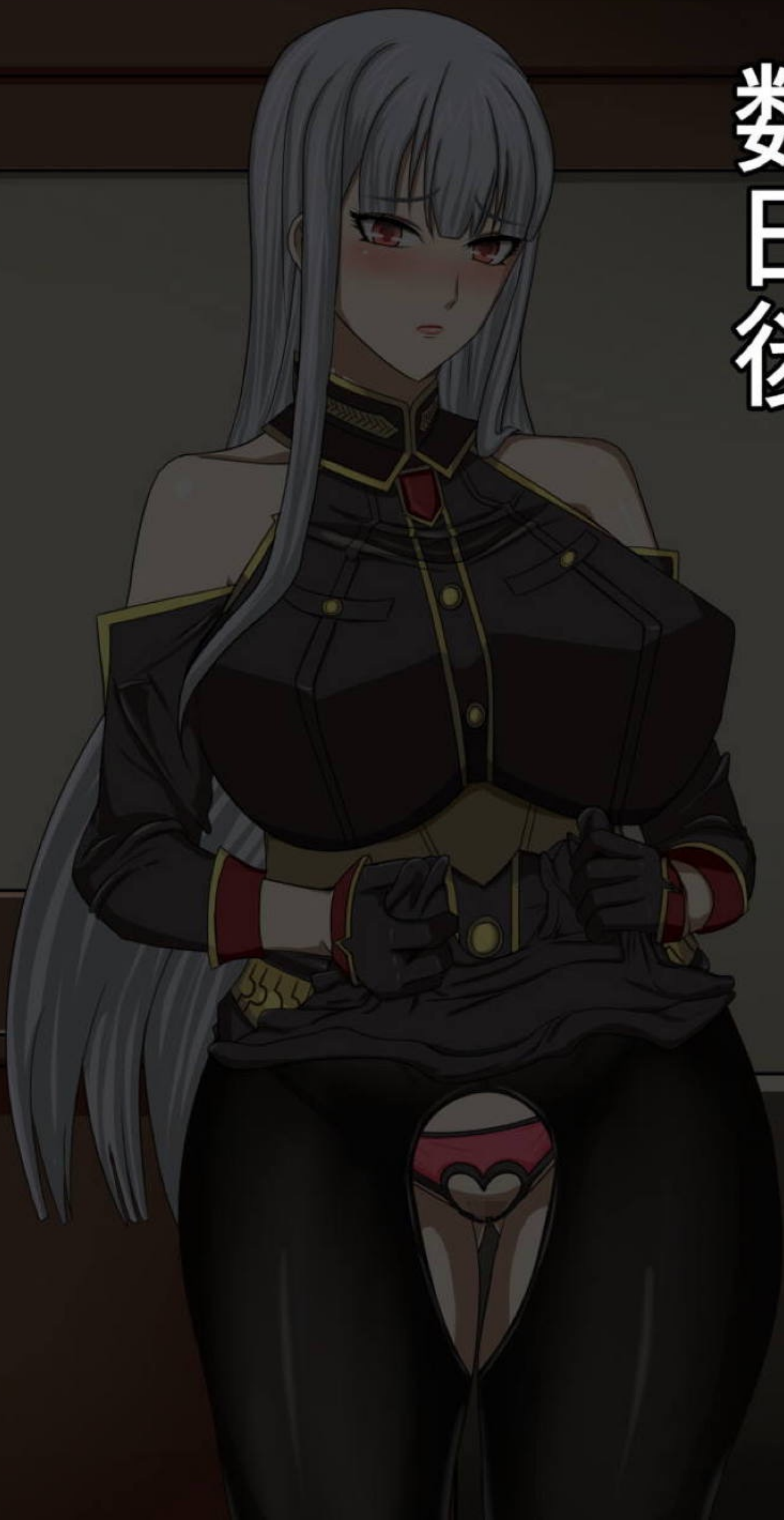
「ひひ、これからは毎晩ケツ穴でオナって  
しっかりほぐれてケツマ○コになるまでは  
ずっとそれを入れて生活してくださいね。」

下着もそれように出し入れが  
便利なものを用意しましたよ」

「何から何までありがとうございます、○○○中尉♥」



数日後





「どうしたんですか？ ずいぶん慌てていらるようですが」

「さ、さつき風でスカートがめくわれて

巡回中の兵士にこの下着を見られてしまったのだ！

ひよっとするとケツ穴に入れてるものまで……

ああ！ どうすればいいんだ……」

(へえ、あれだけ堕ちても羞恥心はそこそこ残ってるのか)

「ひひ、皆に大佐がこんな変態だって知ってもらえて

よかったじゃないですか。

それより私にもそのスカートの中が

どんな風になってるのか見せてくださいよ」





「おお、ケツ穴だいぶほぐれてきましたねえ。  
道具抜いても閉じきれずにヒクヒクしてますよ。」

まあ確かに、このお尻を見たらびっくりするでしょうね。  
下着もいっそ着けてないほうがマシくらい、卑猥なものです」

「も、もうその話はやめろっ！ それより……」



「私のケツ穴、いや…ケツマのゴに  
早くちのポを挿れて鍛錬の成果を試してみろっ♡」

「ケツ振ってアピールするとはセ○ベリア様もも  
ケツマのゴの仕上がり是相当自信がおありのようですね」

（ちのポ好きになってきたのもあるだろうけど  
軍人気質の大佐のことだ。毎晩クソ真面目に職務を果たすべく  
ケツオナでアナル開発に励んだんだらうな、ひひひ）





「んぶっ♡ んんっ♡ ぶうっ……♡」

「ん〜、やっぱりマ○コよりキツめですねえ。  
セ○ベリア様の方はいかがです？  
道具とチ○ポ比べて」

「ぶっ♡ぶどいっ♡チ○ポの方が、  
太くて熱くてっ……  
きもちいいっ♡」









「おっ、マジからはスピードあげてきますよー！」

「あっ♡ふっ♡んぶっ♡  
んんっ♡はあんっ♡  
っっ♡」





「セ○ベリア様も余裕が出てきましたね。  
見てて恥ずかしいくらいスケベな顔になってますよ」

「んっ♡だってっ♡ ケツマンよすぎるんだあっ♡  
それにおまえだって ちんぽっ おおきくっ♡  
あひっ♡ おおきくて♡ きもちいいっ♡♡♡」

（くく、ケツ振ってチ○ポ受け入れるのに  
夢中で頭使えなくなっってやがる）









「んはあ…♡

あついのが…おなかにいっぱいだ…♡」



「浸ってるごころ悪いんですけど  
ケツマ〇コに突っ込んでチ〇ポが  
汚れちゃったんで、口で掃除して  
もらえますか?」



「ああ、任せてくれ♥  
ああっ♥ザーメンまみれのチ○ポ♥  
ぢゅぷぷっ♥れろっ♥ぢゅぱぢゅぷっ♥  
なんてくひゃいんだっ♥」





「臭いのはセ○ベリア様の  
ケツマンコのせいじゃないですか？  
ウ○コが残ってたのかも」

「ぢゅぽぽっ♡ぢゅぱぱあっ♡  
朝に沢山ウ○コしたばかりだから  
私のケツマンコのせいではないぞっ！

お前だって見てくれてたんだから  
わかっているだろうにまったく失礼な奴め  
ぐぽぽっ♡ぢゅぽぢゅぽぽっ♡

（はは、臭いと言われるのにもまだ恥じらうんだな。  
次は自分のニオイでも興奮して  
マン汁垂らすようにしてやろうか……）



一週間後









「今日はずいにおまる無しでトイレに挑戦ですよ。  
これが出るようになれば、いつでもどこでも  
ウ○コでもおしっこでも自由に排泄ですよ」

「……う、うむ。楽しみだ」

(やっとおまるができるのは嬉しいが、  
少し寂しくもあるな……)





「ん……♡」

（外でも出来るように慣れば安心だ。  
おまるは持ち運びが不便で我慢しなければ  
いけなかったし……）

裸でするのにも少し抵抗もあったが、これなら  
「ちやんと手袋とブーツを身につけているから  
誰に見られても大丈夫」だからな。

……恥ずかしくはあるが）





「ふああ〜……♡」

（それにしても……）

外でするのがこんなに気持ちのいいことだなんて♡  
空気がいいのだろうか？

外でするのが癖になってしまっそうだ♡





「すごい！ 外でもちやんと出来ましたね！  
これでもうトイレトレーニングは終了ですよ。  
おめでとうございませす」

「ありがとう、これもお前のお陰だ」

（ああ、清々しい……今度はウ○コを外でしてみよう。  
きつと気持ちいいに違いない♡）







翠日

ガウ  
ガウ

ガウ



「どっつした？ 何を騒いでいる？」

（まったく……我が部隊の練度は高いと思っていたが、  
これでは鍛え直してやる必要がありそうだ）





「ん？ この格好は何なのかだと？  
これは開発中の【女性将校用軍服】だ。

「一見シールを貼っただけの裸同然の変態じみたものに見えるだろうが、極限まで肌を露出することで敵の戦意喪失と味方の士気向上、そして低コストを実現した逸品だそうだ」





「肉便器任務での扇情性及び耐久性」を確認するため  
これよりザーメンぶっかけテストを行う。  
各員チ○ポを取り出してセンズリを開始しろ！

射精の際は乳マ○コかマ○コに狙いを定めるように♡」





「む、どうした？ ……何を言っている？  
冗談などではない、軍の命令だ」

（反応が悪いな…仕方あるまい。  
●●●中尉の言っていた  
アレをやるとしよう）

「どうした、いつも私の淫乱な  
デカパイを視姦てチ○ポを  
硬くしていたのだろうか？  
ふふ、安心しろ。  
叱責している訳じゃない。

私自身、お前達に見せ付けて愉しんでいたのだからな  
ほら、こうやって揺らしてみたり…

よし、ようやく軍務にとりかかると気がなったか。  
さあ早くその勃起チ○ポから臭いザーメンを存分に射精せよ



「はぁ♥はぁっ♥  
い、いいぞお前達っ♥  
その調子でもっと臭いザー汁かけてくりえっ♥」

（ああっ♥身体中が腐ったチーズのような臭いで  
いっぱいでマ○コがあゝっ♥♥♥  
あふうっ♥感じてるの気付かれて笑われてる……  
そうだ♥もっと軽蔑の目で視姦てくれえっ♥）







翌日





「うわっ、凄い臭いですねえ。  
全身ザーメンまみれでシールも剥がされて  
無茶苦茶やられましたね、ひひっ」

「あひっ♥」

「あらら、小便まで漏らして。  
またトイレトレーニングやり直した方がいいかもしれませんね。  
で、部下の肉便器になってテストした結果はどうでした？」

「…ひ…ひあわひええ…♥」



《今日はご主人様と夜のお散歩だ。  
犬の私は人間様と違って服を着られないから  
ちよっと肌寒いけど、お散歩に連れてって  
もらえるんだから贅沢は言えない》

「よし、いらいらくでいらかな」





「セ○ベリア、ムムでおっしゅしろ。  
ちやんと犬らしくやるんだぞ、ひひっ」

「わん！」

（ご主人様は何を言ってるんだろっ？  
らしくも何も私は犬なんだから  
こうやるのが当たり前なのに）





（あ、あれ？ 何でだろう？  
いつもやってることなのに  
上手く出せない……）

「どっした？ まさか出ないのか？  
しょっちゅう我慢できずに漏らすくせに  
許可したときに限って出せないなんて  
どうしようもないやつだな」





（あああっ！ 私は本当に駄犬だっ！  
こんなんじや……）

「牛みたいに乳がデカくて盛りっぱなしの  
恥ずかしいマゾ犬だし、トイレもまともに  
出来ないなら捨てるしか無いかなあ」

「くっ、くう〜ん……」

（いやだいやだ！  
ご主人様に捨てられたくないっ……  
おしっこ出てえ……！）





(あっ♡出たあっ♡)

「おお、勢い良く出すなあ」





「わんわん！」

（みてみてご主人様！  
ちやんとおしっこ出せてるでしょ？）

「ははは、そんな見せ付けなくていいぞ。  
お前は馬鹿な犬だけど、そこがかわいいなあ」

（わーい、ご主人様にほめられたっ！）





「ん？ なんだ〜この垂れてるのは？」

セ○ベリア、お前、  
また自分のおしっここの臭いで発情したのか？」

「わ、わううう……」

（どうして私は「自分のおしっこやウ○コ、汗の臭い嗅いで興奮する変態牝犬」に生まれちゃったんだろう……恥ずかしい……うう、でもご主人様のお子○ポ欲しいよう……）





「しょうがないなあ。部屋に戻ったらハメてやるよ。  
その代わり、部屋までそのままの体勢で歩いて  
途中で人に会ったら、ちゃんと人間の言葉で  
「プレイでやってる」って言って  
よ〜くマ○に見せて挨拶するんだぞ」

「わうーんっ♡はっ♡はっ」

（うれしいっ♡ご主人様はなんてやさしいんだろう♡  
ああっ♡早く部屋に戻って  
いっぱいハメてもらいたいなあ♡  
それで最後にオチ○ポ  
掃除させてもらうんだっ♡）



# 数日後

新しい軍服のテスト参加者や自分を変態牝犬と  
思い込ませて遊んでるところを目撃した兵士達のお陰で  
セ○ベリア大佐は変態痴女だという噂が立った。

笑えることに本人はそれを恥ずかしがりながらも  
「大好きなパパ」に言われた通りの存在になれたと  
誇りに思っでさえいる。そして兵士に蔑まれることで  
マゾ快樂まで満たしている始末だ。  
俺の復讐は大成功と言っでいいだろう。

さて、ここからどうしようか。  
これまで暗示で忘れさせたり、  
意識させなかったことを  
思い出させて遊ぶか。

あるいは今の歪んだ認識をさらに捻じ曲げて  
完全な肉便器に貶めてやるか……



「……いいですか、しばらく意識の外に置くよう指示した  
「恋人のカ●ルくんのが気になって恋しくなります」。  
あと最近、大佐が変態だと噂になっていきますよね。  
「そのことで彼に真実を知って欲しくなります」。

「カ●ル……恋しく……  
知って……ほし……い……」

「……です。そ……」





(……ん？ 私は何を……)

「……大佐、ご指示の通りカ●ル少尉に  
勤務終了後に大佐のお部屋に来るよう連絡しておきました」

「そうか、そうだったな……ご苦労」

(そうだ、カ●ルに会うんだった。  
考えてみればしばらく会っていないな。顔を見るのが待ち遠しい。  
今夜あの噂の誤解を解いて、そして……ふふ♡)





「失礼します。大佐、あの……なっ!？」

「ああ、カ〇ル♥  
よく来てくれたな。

私に変態痴女だという噂を聞いたと思うが  
アレは全て本当の事だ♥

最近会えなかったのも副官との相互性処理任務や  
隊の肉便器としての務めで忙しかったからで  
お前のことが嫌いになった訳じゃないぞ♥

見ての通り、マ〇コもケツマ〇コも毎日乾く暇が  
無いほどザーメンを注がれているが、お前も……♥





「……噂の真偽を確かめようと思っただけですけど、もうその必要はありませんね。……残念です。失礼しました」

「かっ、カ〇ル？  
どうしたんだ？  
待ってくれ！  
カ〇ル！」





「カール……」





「昨夜はカ●ル少尉とやりまくったんですか？」

ひひっ

「いや……そのつもりでお前に射精してもらった  
ザーメンでいっぱいマ○コとケツマ○コを  
見せて誘惑したのだが、怒って帰ってしまったんだ」

「恋人以外のザーメンで満たされたマ○コと  
ケツマ○コを見せるのは、ヴァルキ○リア人の  
最高の求愛行為」なのは常識なのに、  
変ですねえ」

「うむ……カ●ルは何が気に入らなかったのだろうか……」





「セ○ベリア様が想像以上に変態すぎて引いちちゃったんじゃないですかねえ。まあ肉便器にはぴったりでですけど、やっぱり恋人には恥ずかしくて出来ませんよ」

「そんな……カ○ルに私がこんな変態女だといふことは隠すべきだったのだろうか……」  
だが、子どもの頃からずっとこうなりたくてそれを受け入れて欲しかったのに……」





「まあカ●ルくんの愛情はその程度だったという事ですよ。  
そんな薄情な男のことなんか忘れて、私の恋人になりませんか？」

「えっ………  
そ、そんな……急に……いや、  
気持ちは嬉しいが……  
わ……私のような変態でいいのか？」

「私はセ○ベリア様のような変態女も大歓迎ですし、  
なにより私達の子○ポとマ○コの相性はバツチリでしょう？  
それって「恋人同士で一番大事なこと」じゃないですか」

「あ……ああ  
そうだな……そうだ、カ●ルの子○ポは  
見たことすらないが、お前の子○ポには何度となく  
イカされたし、今ではその臭いを嗅ぐだけで疼くくらいだっ  
お前がそう言うってくれるなら……  
あっ!?!  
だが一つ問題が……」





「腋の臭いを嗅がせるなんて  
妙な儀式があったもんですねえ。  
ひひっ、ヴァのキュリア人は  
変態民族なんじゃないですか？」

「ふふ、そうかもしれないな  
だが、それをやるお前だって相当な変態だぞ」

（ああ……●●●に拒否されなくてよかった  
やはりこの男は私の運命の……）





「それでこの蒸れ蒸れの腋にチ○ポを  
なすりつけられたいんですね」

「うむ。 ああ」

腋にチ○ポの熱が伝わってくる」

「興奮してるんですね？ ますます汗が出てきましたよ。」

腋までマ○コみたいに対応しちゃうなんて

セ○ベリア様は本当に変態ですねえ」

（ふふ、○○○にならこんな変態でも

受け入れてもらえるから詰られても怖くない……

嬉しい♡ カ○ルとは大違いだ）





「よ、よし、チのポに腋臭が移ったら次はこの鼻フックをつける。」

これは「ヴァ○キュリア人の女は変態のメス豚であり、恋人になってくれるオスには絶対服従する」という意味を表しているのだぞ」

（ちやんと儀式のやり方をパパに教わっていてよかった。ん？そういえばカ●ルとはやっていないな……  
そうか、「心の何処かで奴を恋人と認めていなかったからだ。ふふ、結果としてはやらなくて正解だったな♥」





「で、後は【チ○ポを鼻に押し付けて匂いで恋人にふさわしいか判断する】んですよね？  
本当に豚にふさわしい民族ですねえ」

「そっ、そうだった♡ ああっ、焦らさないで  
早くお前のチ○ポを嗅がせてくれっ♡」

(この距離でも鼻を刺激してくるこの臭い♡ たまらないっ♡)





「せっかくだし、豚らしく鳴らしておねだりしてくださいませ」

「なっ…ま、まったく…♡ しょうがないやつだな♡」



ぶ、ブヒっ♡ブヒっ♡

「牝豚セ○ベリアに早くチ○ポ臭がせてくれブヒっ♡」

「……はははっー！ いいですよ、ほらっ  
しっかり嗅げよ、メス豚！」

「ぶひひいああんっ♡♡」



「どうですか？ 恋人になっでららですか？」

「も…もひろんひやあ… あらっでひゅひゅ…  
ぶひっ…」

「そうですね、それはよかった。」

私も愛してますよ、セ○ベリア様」

「うれひい…」

チ○ポの臭いだけでイカされてしまっひや

やはり○○○はわたしのうんめいのだんせいひやあ





数週間後





「ん、よく寝た。」

「ああ、おはようございます、セ○ベリア様」

「おはようじゃない、もう昼前だ。」

「まったく、休日だからといって寝過ぎだぞ」

「(刷り込んだ変態儀式で恋人になったあの日以来  
自発的に部屋へ通ってくるようになったな。)

「[変態である自分を受け入れてくる愛しい男]

「だと思いついて、甲斐甲斐しく尽くしてくるから  
おかしくてしょうがない」



「れるっ♥ ぢゆるるっ♥ ぢゅびっちゅぽんぽん♥  
身体も生活もたるんでいるくせに  
いつもチ○ポだけは硬くして……  
お前みたいなのやつは私の乳マ○口で  
指導してやらねばっ♥」

（あの蒼い魔女と呼ばれ恐れられた大佐も今では  
こちらから誘うまでもなく、こうやって  
理由をつけては「恋人」の俺とじゃれ合おうと  
してくる浅ましくもいじらしい変態女が、ひひっ）



「んっ♡ちゅっ♡ちゅぶっ♡ちゅぶぶっ♡ちゅぶぶぶっ♡  
れるっれるっ♡れりよりよっ♡ぢゆるるるるるっ♡

はあ…はあ…♡ 毎日掃除してるのに  
すぐチンカス溜まって、いつも臭いザーメンで  
キンタマぱんぱんで…♡  
こっ、こんな性欲過多な絶倫チ○ポ、  
私みたいな変態豚じゃなきや  
付き合いきれないぞっ♡」

（これも要は自分達がお似合いだという  
アピールで愛情表現のつもりらしい。

植えつけられた自分が変態だという認識と  
それを曝け出して恋人の力○ルに拒絶された  
経験から、相性の良さを訴え、献身的に  
奉仕する♡とで捨てられないようになってくる）



「そうですねえ、大佐みたいな変態牝豚を  
恋人に持てて私は幸運な男です。  
愛してるよ、セ○ベリア」

「~~~~っ  
……わっ、私も……  
愛してる……」

（マ○うやってちよっと愛情って餌をやれば  
あっさり犬みたい尻尾振って喜んでくる。

商売女顔負けの淫らなパイズリフェラしながら  
乙女子ツクな喜びに浸るギャップが面白いな）



「ぐんぐん♥ ロマの「でもっと気持ちよくして、  
ザーメンたくさん絞り出してやるからなっ♥

ぐぽっ♥ ぢゅぽぢゅぽぽっ♥ ぢゅぢゅぽぽっ♥



（ひひっ、こんだけチ○ポに吸い付いてたら  
どんな美貌も台無しだな。  
今のセ○ベリアなら暗示を付け足さずとも

愛の言葉を囁けば、人前だろうが戦場だろうが  
どんな変態行為も喜んでやるだろうな）



「ぐぽっ♡ぐぽぽっぢゅぽっ♡  
ぢゅるるううううぢゅびぢゅびっ♡んぱっ♡  
んぱっ♡ むもむららぶあ〜♡」

「ええ、ロマンティックな乳プレイで射精してまらんぞわい」





「んぶっ♡ いいひよ♡

このままくひまん♡になかだひひてくれっ♡

「今のセ○ベリア様のロマ○」っぶりなら  
本当に口でも孕めそうです、ねっ！  
ほらたっぷり飲んで孕めっ、セ○ベリアー！」

「んぶぶぶひひゅああっ♡♡♡♡



「はぁあ〜……♡

相変わらず馬並みの大量射精だ♡  
ふふ、しかもまた硬くなってきた……♡

どうする、次は乳マ○コに中射精しするか？  
お前は私のデカパイが大好きだからなっ♡

はぁあ……♡

「ひひ、お願いします。

でも別にエロ爆乳だけじゃなくて

具合のいいマ○コも肉付きのいい桃尻も

汗で蒸れまくりの臭い腋マ○コも……

セ○ベリア様の身体全部を愛していますよ」

「ばっ、馬鹿……♡

んちゅっ♡」



「いやあ、射精してもセ○ベリア様が離してくれないせいで結局3回もしちやっただからお腹ペコペコですよ」

「なっ、お前だって乗り気だったじゃないか！  
まったく……少し待っている。  
すぐ昼食を用意するから♥」

(おっ……この新妻のようなセ○ベリアも悪くはないけど  
少し食傷気味だし、趣向を変えてみるか)





「今は勤務中で、目の前にいる男は上官。  
彼の質問は重要な事情聴取だから包み隠さず答えなければならぬ。  
またこの状況や彼の行動、自分の格好に疑問を持ってはいけません」

「……勤務……答える……疑問……持たない……」





「よるしい。それではこれより君の淫乱度及び私生活の聴取を始める。何をされても可能な限り平常心を保ち、包み隠さず質問に答えるように」

「了解しました、閣下」

(ひひ、最近仕事ですら色ボケしてすぎあらば俺に擦り寄ってチ○ポねだってくる有り様だったから、新鮮に感じるな)





「まず君は以前カ〇ル少尉と交際していたはずだが、今現在彼のことをどう思っているのだね？」

「んっ… カ〇ル少尉のことはもう考えたくもありません。それと、その情報には誤りがあります。」

ほんの一時カ〇ル少尉に好意を持ったのは事実ですが、それは気の迷いであり、また彼とは儀式を行っておらず恋人だった期間は一瞬たりともありません。あんな狭量な男、今では嫌悪感すら覚えます」

（ははは！ あの時刷り込んだ常識から、そんな解釈導き出したのか。カ〇ルくんも嫌われたもんだ。よほど拒絶が堪えたらしいな。そこら辺の記憶は弄ってないはずなのに、女は怖いねえ）



「ふむ…次は現在交際している○○○中尉についてだ。彼はどうなんだ？ 彼とも気の迷いなんじゃないか？」

「いっ、いえ、○○○は儀式も済ませた正式な恋人ですっ！ 私には彼を愛して…彼も、カールなんかとは違って、変態牝豚の私を受け入れ、愛してくれています」

も…もし、可能なら…軍を退役して、彼の妻になり…  
そして、彼の子を…」

ははっははは！

存外女らしいところがあるとは思っていたが、ここまでとは！  
変態女に堕ちただけじゃなく、石の力で演出された愛情から  
こんな可愛らしい未来図を考えていたなんてな



「しかしねえ、君はちよっとマ○コを舐められただけで  
マン汁垂れ流し、ごうやって他の男の子○ポを平気で  
受け入れる変態豚だ。彼への想いも所詮子○ポに  
惹かれたただけで、愛情なんて高尚なものじゃないだろう」

「んんっ……♡ そ、んなことばっ……♡」





「ほう、否定するつもりか。」

「だげどマ○コの方は違う意見のようだぞ。」

「ほら、ムうやって激しくしてやっても  
しっかり食らいついてくる」

「んあっ♡ひっ♡ひやうっ♡

ちがっ♡ちがいますうっ♡

わたっ、わたひはあっ……」

「何も違わないだろう。君の痴女行為に参加した部下も言っていたぞ。  
「ザーメンかけられただけでイク淫売だ」と」





「ふふ、そんなに声を上げてると  
●●●中尉が来るかもしれないぞ？  
いくら君を受け入れると言っても  
他人の子○ポでよがってるところを見たら  
見捨てられるかもしれないな」

「ひっ……！ いやあっ……！  
ぶっっ、ぐっっ……！……！」

（お、我慢しだした。さてどれぐらい耐えられるかな。

最後まで大声あげなかったら……！ひひ、望み通り【結婚】してやるか）





「ほう、変態豚の淫売としては頑張るじゃないか。だが膣内で射精されたらどうかな？君はそれが大好きらしいからなっ！」

「ふふふふっ……！」

……っ！……っ！……っ！

ひゅうっ……」

（ふひひ、アクメ顔晒しながらも耐え切るなんて  
いじらしいじゃないか。マゾだからこんな場面じゃ  
さぞ感じてただるうに）





「う〜む、君の肉欲に負けない愛の深さには感服したよ。

褒美に私の方から〇〇中尉に君との結婚を打診してあげよう」

「あひひ…♡ あ…ありがどういじぎらますっ…閣下っ」

「うむ。ああ、ザーメンが垂れて

〇〇中尉に見咎められないように

ニンジンで栓をしておこうか。

今日一日抜け落ちないように気をつけるんだぞ」

「はっ… ああ…うれし〜…♡」

（ひひ、最高の結婚式を用意してやるからな…）





# 数カ月後……

「ひひ、お腹も胸も大きくなりましたねえ。  
しかしすっかり妊婦らしくなってきたのに  
こんないやらしいなんて悪いママだ」

「ひひ」

「じゃあパパのチ○ポでおしおきしてくね」

（結婚し、軍を抜けて●●●の子を授かり……  
望んでいた通りの夢の様な生活だ♥）



数日後







（今日は●●●と私の結婚式だ♥  
急なことだったが上官が掛けあって  
くれたのもあり、行いうことができた）

（●●●のお陰でヴァ○キュリア人の  
伝統の変態豚嫁衣装を身につけ、  
乳首に結婚指輪まで……♥  
●●●のような男と結婚できる私は幸せものだ♥）



「皆、今日は私達の結婚式に  
参加してくれてありがとうマ○」  
♥

（「変態豚嫁の挨拶は下の口でする」  
●●●に言われなければ  
忘れるところだったな）

（ああ、部下達も皆笑顔で……

「チ○ポ勃起させて祝福」してくれている♥

皆私のマ○コを視姦してるな  
心ふ、変態豚嫁として  
恥ずかしくない正装をしてきてよかった♥







「でっ、では豚嫁が  
嬉ションシャワーするから  
皆ザーメンシャワーで  
祝福してくれマ○コおっ」

（あああっ♡ 部下に見られながらする  
おしっこきもちいい♡  
恥ずかしさと臭いでイッてしまっそうだが  
終わりまで耐えねばあ……♡）







「ささぽぽぽ〜、ぽぽ〜」

「あひひゅうんっ」

「パパチのポキきたあっ」





「ひひ、孕んでも相変わらずの乱れっぴらですおねえ。  
いや今の方がもっと淫らになったかも」

「んっ んふっ お腹が大きくなっで、

いつも以上にお前のチ○ポが深くきぎてえっ

きっとお腹のこの子がパパとママと  
愛し合ってほしがってるんだっ

ママっ、パパを愛してるぞっ

愛してるっ ♡愛してりゅ○○○○っ~~~~♡



「深く愛してもらって光栄ですが  
らっつもそれじゃ飽きるんでね」

「は……？」





「……ん？」

「はい、久しぶりに「常識や価値観、記憶  
全てを暗示かけられる前」の自分に戻った  
気分はいかがですか？」

（この男は……）

私は何故裸で……？

（この男は……）





「なっ!?!」

なんだこれはっ!?!

●●中尉っ! 何のつもりだ!

私からどけえっ!!」

「ははは、混乱してるみたいですねえ。私、大佐……ではもう無いですね。

セ○ベリア様に乗っかられてるんですよ。

さっきまであんなに愛してる愛してる言いながら情熱的に腰振ってたじゃないですか」



「なっ、くっ、何を馬鹿な……！」

一度しか言わない、今すぐこの妙な真似をやめる！  
さもないと、命はないぞ！  
貴様も私の力は知っているはずだ」

「いいですねえ、それでこそ

蒼い魔女、セ○ベリア・ブレス大佐。

ボテ腹でチ○ポにまたがってなきや  
震え上がっちゃうところですよ」





「あひひひんちゅってちょっとチ○ポで小突らしてやねば」

「あひひゅっ」

「開発され尽くした身体はそのままですからね。

その時点の記憶では多分ご存知無かった  
でしょうけど、セ○ベリア様は子宮口に  
チ○ポでキスされるのに弱いんですよ」

♡♡♡

（からだがあ♡なんだ？  
なにがおこってる？）



（そっか、私は……）

「うあああああ……！」

「お、記憶が戻って来たようですね。

まず「二度イクと記憶が現在まで戻る」よう  
暗示をかけましたからね。

ちなみに「二度目で暗示が変わった常識・認識  
感情すべてが再び効果を発揮する」ように  
なってるので、まあ耐えてみてくださいさら」

「ぐうぐうぐう……  
貴様あつ……！」



「えへ☆

あへああつ

」

「おや、ご自分から腰下ろしてイッちゃいますか。これは予想外だったなあ」

「ひやってえ…

もうどいじりももどねないけどお

おまえならあいしてくれりやるおっ

いっぱいあいひてえっ」

（ああ……自分の思考が塗り替えられていってるのがわかる……こんなの………）  
（こんなの………しあわせ）



「ああ、5分耐えられたらそのまま解放してあげてもいいですよ。

まあ、軍では変態豚嫁として以前とは違う意味で有名になってるから戻らない方がいいでしょうが。

そうそう、元恋人のカ●ルくんも

最低の変態女だって吐き捨ててましたよ」

「うああああ……黙れ……だまれえええっ！」

（ううう……）

（もう……もう私には何も……）



# 数年後……

「んっ♡んっ♡んちゅっちゅぷっ  
はあん♡んぷっ♡んぢゅぷんんっ」





「ひひ、愛してるよ。セ○ベリア」

「うれしい……」

私もだ

お前も、お前の子も、お前のチ○ポも  
ザーメンも心から愛してるぞ

（こんな素敵な生活、

変態豚嫁冥利に尽きる……

私は本当に幸せ者だ



「んふっ♡んっ♡あっ…はあ、はあ…  
あんっ♡あなた…♡どうして…?」

「ん？ 子どもたちの様子を見てマコようつかなと思っっ」

「そんな、さつき寝かしつけたばかりだから  
まだ大丈夫だ…  
だから、続きを…♡」





「らやらや、まだ小さいから心配だよ。  
わ、足おどろと」

「い、いやだっ ♡

そんな意地悪しないでくれえ ♡

ここまで高ぶらせて焦らすなんて  
あんまりだあ！

絶対離さないぞっ ♡」





「しょうがないママだなあ。  
そんな声上げて駄々こねて、子どもたちが  
何事かと見に来たらどうするんだ？」

「んちゅうう〜っ♡んふう♡  
あ、あの娘達もヴァのキュリア人の女だ。

いずれ「パパに奉仕する変態になる」のだから  
今から英才教育すればいいっ♡

んふう♡だからもっとおっ♡  
べるべりよお〜♡」





「ひひ、母親に似て美人だからなあ。  
そんな仕込まれたらセ○ペリアより  
夢中になっちやうかもしれないぞ」

「れるれるっぢゅぶっ  
んべえるおっ  
ぢゅぶぶにゅぶっ

いやあっ♥ ママ負けないからっ♥  
娘たちにない淫乱乳マ○コと  
熟れ尻マ○コでいっぱいご奉仕するからっ♥

捨てないでっ、あなたあっ♥」









「なんだ、またキスだけでイッちやったのか。  
お気に入りのこの体位でやるといつも一人で  
勝手にイクんだからなあ」

「あんう……ごめんなさい  
でもこの体勢が一番すぎなんだあ  
愛しいあなたの顔見ながら

チ○ポ奥までハメてもらえるから……

ん、今度はもっとマ○締めるから  
もう一回……」

「ひひ、愛しの妻の頼みならしよづがないなあ」

「んふ♡うれしい……」





「今日は何から始めるんだ？  
チ○ポカウンセリングでもケツハメでも  
用意はできているぞ♥」

「ははは、やる気満々ですねえ。  
でも今日は趣向を変えようかと」





「というわけで、これから「今まで何をされたのか  
正常に認識」してもらいます。ただし「……」





「……」です。わかりましたか?」

「すべてで……認識……おもしろい……だす……」



「結構です。じやあ始めましようか」



「貴様っ！ これまでよくも弄んでくれたなっ！！  
覚悟しておけ、楽には死なせないぞ！」

「おお、怖い。  
一体何をするつもりですか？」







「ふん、ニヤけていられるのも今のうちだ。  
私がこの体勢を取った以上  
貴様には正義の裁きが下されるっ！」

「さあ私の腋に顔を押し付けろ！」



「うわー、大佐の腋くっさいなあ」

「当然だ、**「ヴァ○キュリア人の腋臭は悪しきものには耐え難い刺激臭となる生物兵器」**なのだからな！ さあ、観念しろ！」





「へえ、臭いだけで別に何もありませんけどねえ。  
これって私は悪くないってマジですか？ ひひっ」

「なっ!?! くっ……そんなはずはない！  
ふん、やせ我慢したことを後悔させてやるっ」







「ならばこれでどうだっ！」

「ヴァ○キュリアの処女膜は  
悪しき者が見ると目が焼けただれる！」

「貴様の瞳に我が処女膜を  
焼き付けてやるっ！」





「何ともありませんよ。  
そもそも大佐の処女膜なら  
私が破らせてもらいましたし」

「はっ…!?! そ、そうだった…  
ぐっ…こうなったら…」





「くっ…くっ…くっ…」  
【おっくわっくわっくわっ】砲】っー」



「ははは！ 急になんです？  
立ちションしないといけならほど  
漏れそうだったんですか？」

「ふんっ、笑っていられるのも今のうちだ！

これこそヴオルキュリア人の  
禁断の秘儀、おしっこしーしー砲！

「悪しき者がこの小便砲撃を浴びれば  
たちどころに皮膚は焼けただれ、  
骨が腐り落ちて溶けてしまおう」という  
恐るべき攻撃だ！」







「あまりに残酷かつ恥辱の技ゆえに  
極悪人以外に使うことは  
禁じられているが、  
貴様にならふさわしい。」

自分の行いを悔やみながら  
消え去ってしまおうがいい！」



「……痛くも痒くも無いんですけど  
むしろからぶさむせしてるんですけど？」

「なっ…!?!」

（そんな…何故だ!?!  
まさか……）





「ひひっ、本気でやってるなら、  
やっぱり私は悪くなかったという  
ことになるんじゃないですかねえ。」

臭い腋臭がせたり、汚いもの  
見せつけてきたこと  
謝ってもらえませんか？」

（くっ、確かにそうなる……  
しかし、だとしたら……）

「……いいいだろう。  
だが、最後にもう一度だけ貴様に  
本当に非がないのか確かめさせてもらおうぞ」





「ケツの臭いを嗅がせるだなんて、セ○ベリア様は私が余計なことしなくとも充分変態だったんですねえ」

「か…勘違いするな。」

「ヴア○キュリア人の女はみな変態牝豚だから信頼できる人物かどうかは相手の最も臭い場所の臭いを嗅いで判断しなければならない」のだ。

「私がやりたくてやるわけではない」



「まあ嗅ぐだけなら構いませんが、  
さっきトイレに行って拭いた覚えが無いんで  
臭くても勘弁してくださいよ、ひひひ」

（ううっ、確かめるためとはいえ  
こんな場所に顔を埋めないといけないとは……）

ああ、やはりひどい臭いだ。  
この臭い……）



「はあはあ♡

ふー♡

ふー♡

すう〜♡

」

（あああ♡ 何故だ、臭いののに、  
こんなに臭いのに興奮してもっと深く  
肺の奥まで吸い込みたくなるっ♡）








「れるっ♥ぞりゅぞりゅっ♥はあ♥はあ  
ぢゅりゅううう♥」

（ああっ♥味もひどいっ♥  
変態牝豚にはたまらない味だ♥  
いつまでも舐めていたくなる……♥）





「あれ、舐める必要もあるんですねえ。  
それで私の身の潔白は証明されましたか？」

「あ、ああ。お前が正しい。こんなに「臭くて  
変態牝豚を発情させる臭いをしてる人間の  
やることが間違ってるわけがない」っ♡

だ…だから、私が間違っていたおわびに  
お前の尻を私に綺麗にさせてくれっ♡」



「うくん、実は私、大佐に【判断能力が低下】して  
【臭いで善悪を判断】するよう  
暗示をかけたんですよ。」

その事とこれからも暗示をかけて弄ぶのを  
許してもらえらるなら、ケツ舐めさせてあげます」

「ああっ♡ ありがとう♡  
もちろん構わない、こんな臭い尻穴を持つお前の  
言う事だ、全て正しいに決まってるっ♡

じゃ、じゃあ、舐めていいだろっ？  
んぢゅっ♡ れりゅれりよっ♡ ぢゅぷぶぶ  
すうー♡ すうー♡ れろっ♡ れろろろっ♡



数日後





「やあ、おはようございます、セ〇ベリア様」

「ああ、待っていたぞ」





「今日も牝豚大佐の任務遂行に  
協力よろしくマ○コ」

「ひひ、その挨拶も板につきましたねえ。  
ちやんとマ○コ用の用意もしてあるようだ」





「うむ、ちやんとお前のパンツの  
臭いでオナって三回イッておいたぞ

「さあ今日はどのマ○コを使う？  
どれでもお前が一番乗りだぞ」





「じゃあロマの「使わせてもらってますね」

「うむ、了解した  
ふふっ  
溜めて来てくれたのか  
んちゅ」  
今日もこんなにチンカスを



「んぷっ…♡ぢゆるる♡ぢゅぱぱ」

（このむせ返るようなオスの臭い、

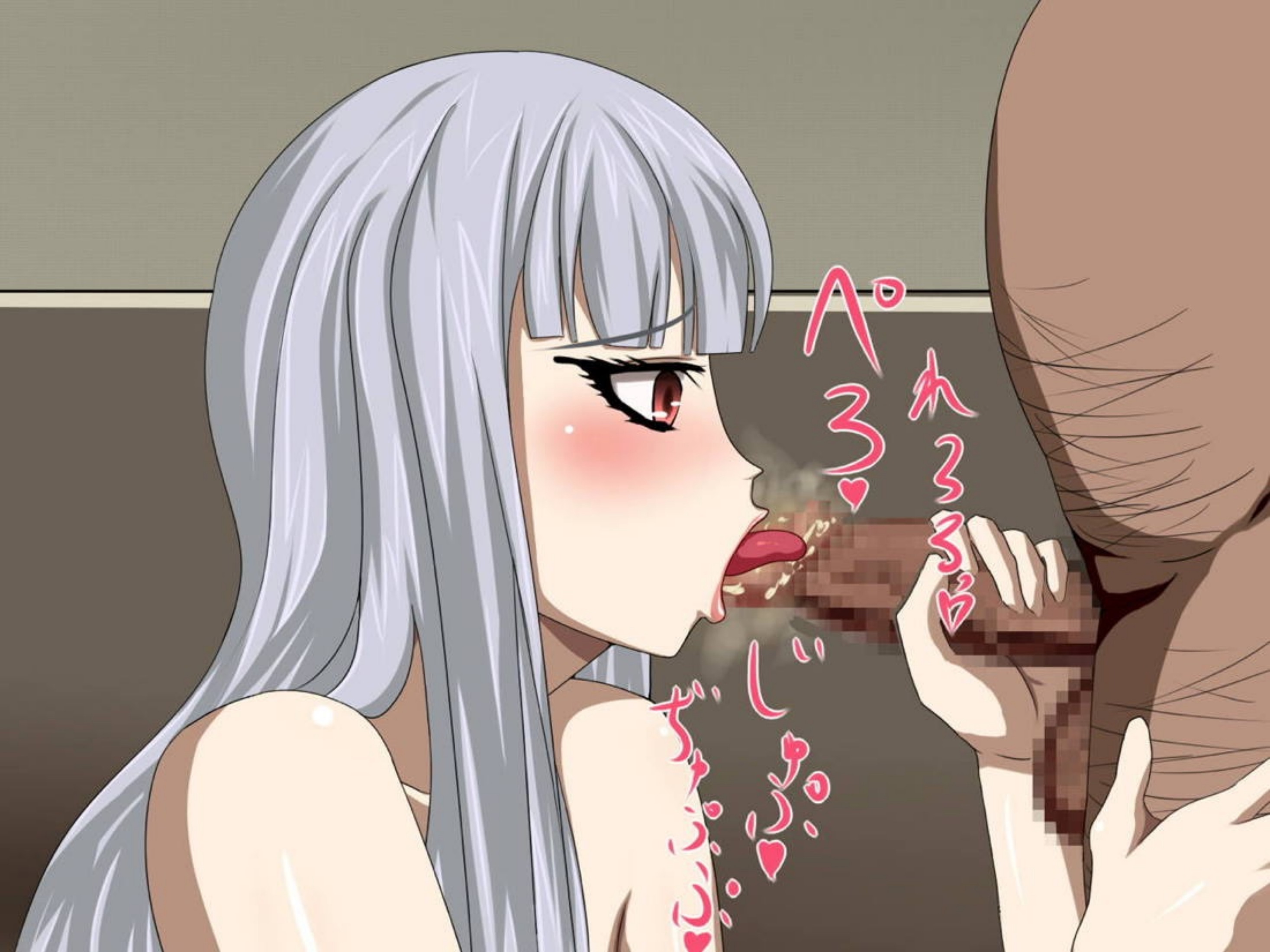
刺激的な塩味…♡

職務だがすぐに終えてはもったいない♡

じっくり味わってから飲み込ませてもらおう♡♡









「もぐもぐ…♡  
ぐちゅっ♡  
くちゅっ…♡  
ごぎゅっ♡  
今日もエグみのある  
いいチンカスだったぞ♡  
ちゅっ♡」

（よし♡次はメインの…♡）







「んぼっ♥ぢゅぶぶ♥くぽう……」

（○○○中尉のチ○ポだと  
口をいっぱいに開かなければ  
啜えられないから一苦労だ♥  
その上……♥）





「ぐぼっ!?!」

「...っぬっ」





「ずじゆる♥ぢゆるっ♥ぢゆるるるるう  
ぶぶっ♥ぶぶっ♥ぢゅぽぽ」

（まったくこの男ときたら……♥  
こうやってデカチ○ポで  
喉奥まで犯すのがよほど好きらしいな♥  
いくら

「牝豚大佐は軍属の家畜」で備品扱いとはいえ  
ここまで物扱いして性処理に使うのは  
この男ぐらいだな♥）









「んぶぢゆるるるっ♥ じゅぶぢゅぶっ♥  
ずぶじゅっ♥ ぢゅぶっれりよれるおっ♥♥」

（んふっ♥ 根元の臭いは濃いな♥  
陰毛が密集してるここに鼻を突っ込むと  
ああっ♥ ずっとここうしていたいっ♥）



「ぶぼあっ!?! んぶぶうっ...」

(いつものことながら口マ○コを孕ませようとするかのようなこの射精量……鼻まで犯してくる)

ああっ、ザーメンが吹きこぼれてしまった。もったいない、後で舐め取らねば





「ひひ、やっぱり朝一番はよく出るなあ。  
あ、飲み込んでいいですよ」

「ひゃひらひゃひょんっ♡もぐっ♡んぐっ♡  
はあ……」

（ぷりぷりのザーメンはやはりいい♡  
これを毎日飲めるといっただけでも  
牝豚大佐の地位につく価値があるといっものだ♡）



「やあ後処理はそれぐらいで充分ですよ。  
そろそろ準備しないと」

「ペロペリよっ  
れるお……♡  
ん、あ、ああ、  
そうだな……♡  
れるろっ♡  
」

（いけないな、  
つい職務だというのを  
忘れてチ○ポ舐めに没頭してしまった♡）



「はい、出来ましたよ。  
今日も牝豚大佐のお仕事  
頑張ってくださいね」

「うむ、ご苦労」

（さて、今日は何人に利用されるだろうか♡  
チ○ポを洗わず、小便も私で済ませるよう  
部下たち皆で協力してくれて有難いことだ♡

ああ、そう言えばカ●ルには泣きつかれたな。  
まったく、牝豚大佐に任命された以上  
恋人でいらられるわけもないだろうに……)









数  
力  
月  
後





「セ○ベリア様、今日の業務報告お願いいたします」

「うむ、午前中は通常通り、兵舎を四つん這いで人間様おち○ポでハメていたただきながらオチ○ポ慰安任務を遂行した。」

昼の餌はその際に頂戴したザーメンに絞って頂いた自分のミルクを混ぜたものを摂取することで、時間・コストの節約が出来たと自負している」





「午後からは市街地の巡回を行った。

最初はこの乳牛牝牛専用軍服にとまどって私を人間だと勘違いした者も多かったが、性処理家畜だと理解したら、チ○ポを突っ込んだり乳搾りと大好評だった

もっとも女性からは侮蔑や哀れみの目で見られたが、恐らく彼女達は牝豚の喜びすら知らないのだろっうな

常時準備  
OK  
中山

豚の  
放題!

爆乳牝牛  
大佐  
たす

その中に牝豚に適した容貌の者がいたから、いつも通り捕らえておいたぞ。後で家畜調教をよろしく頼む。報告は以上だ」

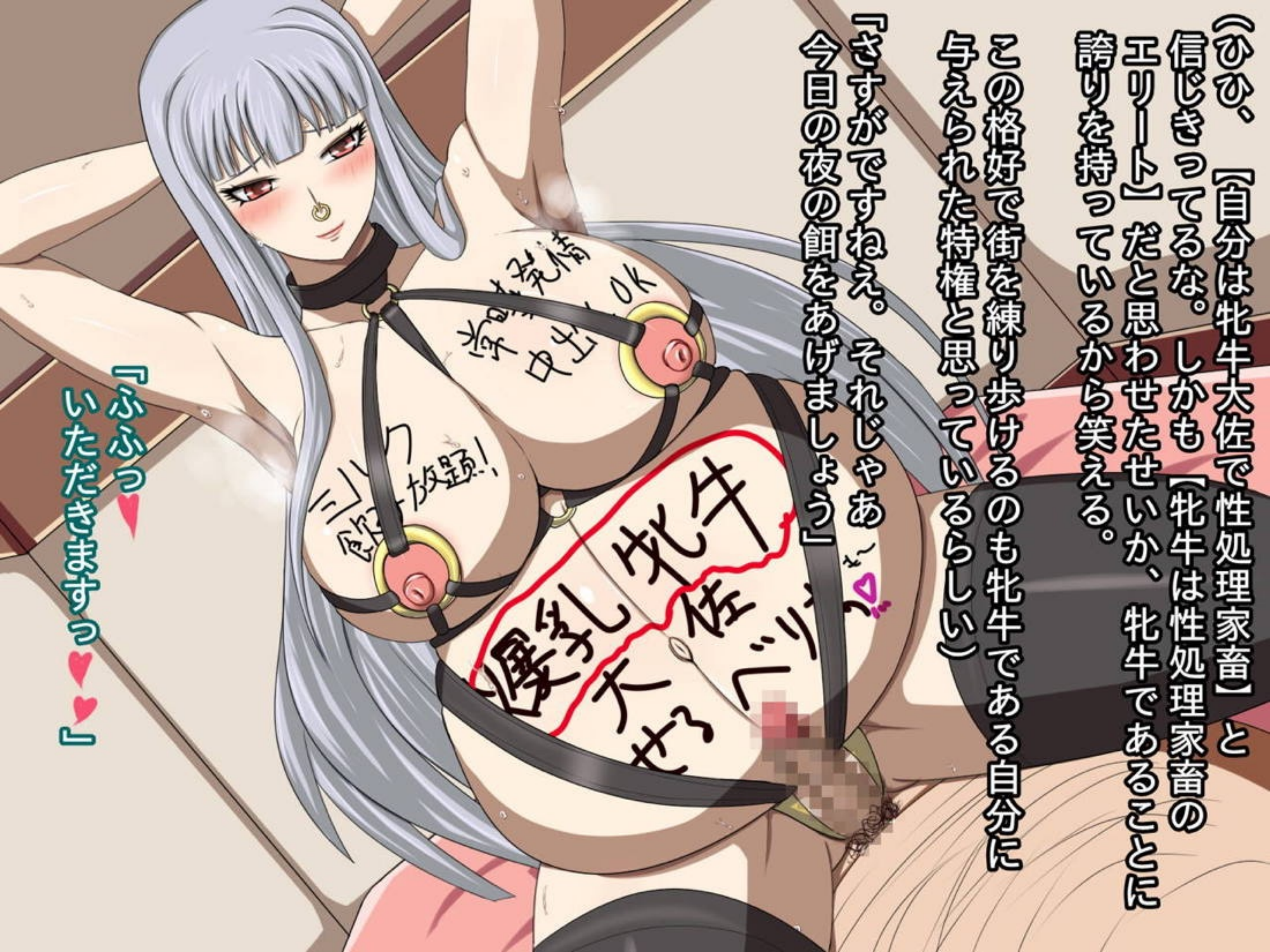


(ひび、)「自分は牝牛大佐で性処理家畜」と  
信じきってるな。しかも「牝牛は性処理家畜の  
エリート」だと思わせたせいか、牝牛であることと  
誇りを持っているから笑える。

この格好で街を練り歩けるのも牝牛である自分に  
与えられた特権と思っているらしい(っ)

「さすがですねえ。それじゃあ♡  
今日の夜の餌をあげましょう」

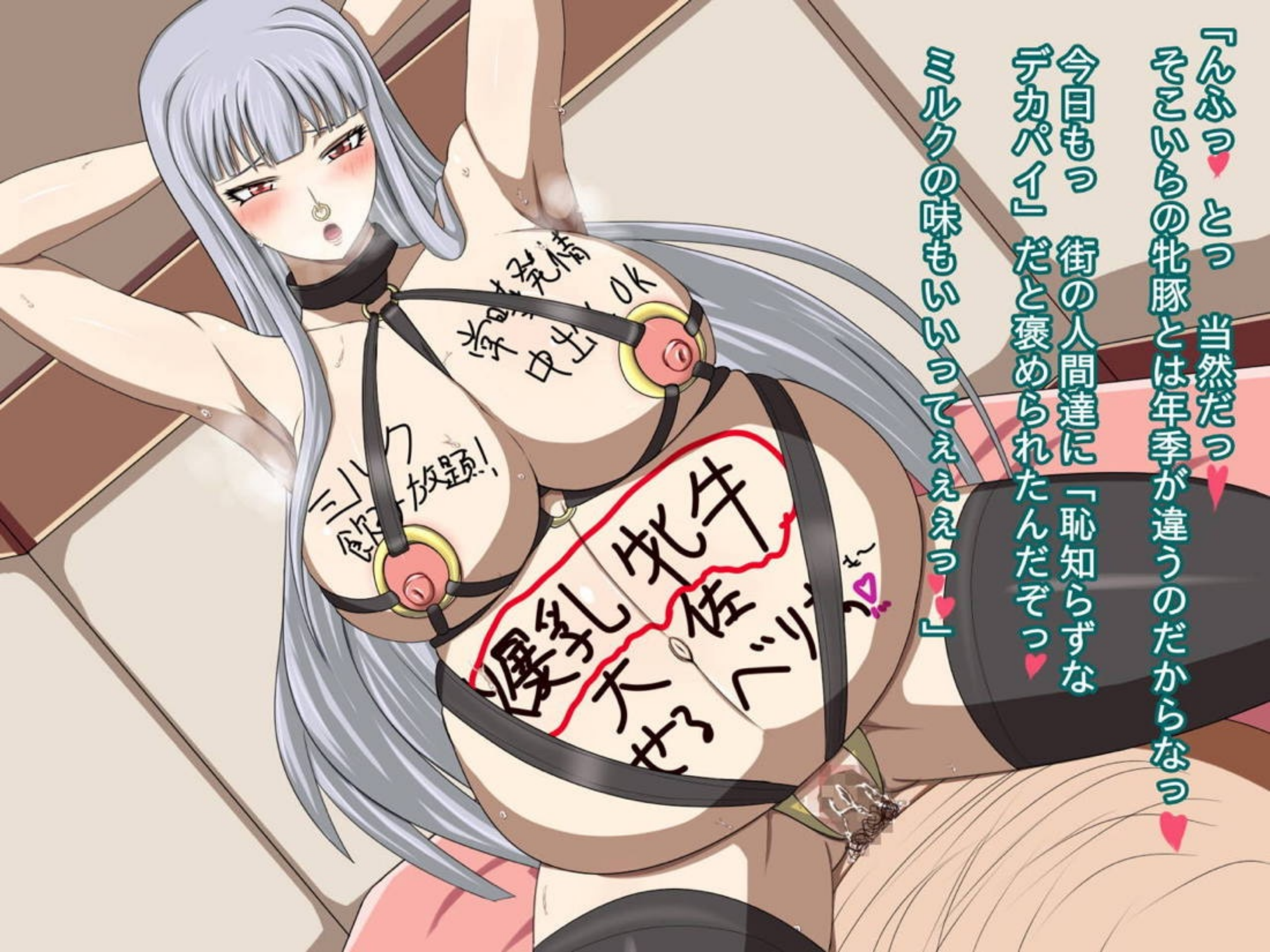
「ふふっ  
いただきますっ♡♡」











「んふっ♡とっ ♪当然だっ♡

そこいらの牝豚とは年季が違うのだからなっ♡

今日もっ ♪街の人間達に「恥知らずな  
デカパイ」だと褒められたんだぞっ♡

ミルクの味もいってえええっ♡



「へえ、でもそれほど牝牛っぽくはないですよ。顔も鳴き声もぶぐぶぐみっともなくて牝豚みたいですよ。」

それにミルクも出てないし」

「なっ 何を言うんだっ

くうっ

んはあっ

あうっ

違うっ

も、もおっ

もおおほおっ

」

「乳牛  
大淫  
爆乳」

常時準備  
中出 OK

淫乳  
放題!

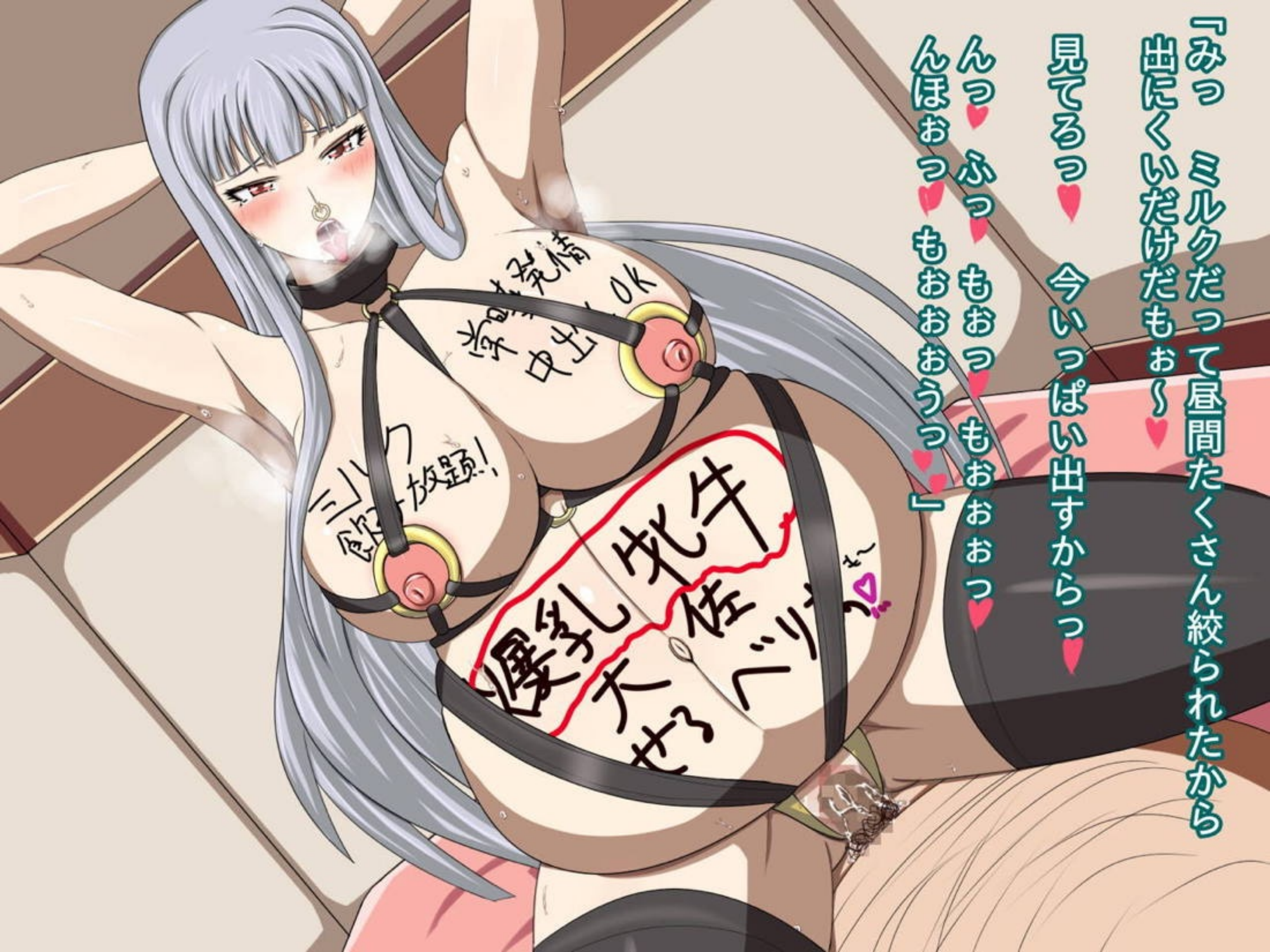
(ひひっ、ひひっ、) 鳴き声を慌てて変えて……  
よっぽど牝牛に見られたらいらんな



「みっ ミルクだって昼間たくさん絞られたから  
出にくいだけだもおっ」

見てるっ  
今いっぱい出すからっ

んっ♡ふっ♡もおっ♡  
んほおっ♡もおおっ♡  
「もおおっ♡」





「もおおおほおおおっっ

ほ、ほりや……

いっぱい射精たもおお……?」

「ひひっ、そうですね。」

やっぱり大佐は並ぶものいいない  
変態牝牛ですよ」

常時準備  
中山 OK

放題!

爆乳大佐  
おっっ

「あへっ

とっげんぢぢやあももっ……」